

まるで巨大なライトを焚いたような、目が痛いほどの強い強い光。

カアッとするその光によって、夜の闇は吹き飛んだ。辺りが一気に昼のようになり、三人は短い悲鳴と共に、無意識に目を閉じて顔を覆った。その後、地震が来たように、地面がわずかにカタカタと震えた。

時間にすると、五秒ほどだったろうか。

その光と振動は、間もなく消えた。

闇が戻り、再び夜の帳が降りた広場で、三人はぽかんと見つめ合った。ネックは口を半開きにして固まり、ノランは頭上に「？」を連発させ、リアムはぱちくりと目をしばたたかせている。ランタンが三者三様の呆ける顔を照らしていた。

「……なに？ 今の……」

ようやく、リアムが呟いた。

「花火……？」

ネックは周囲を窺った。

闇夜の中で、並び立つ木々が夜風に揺れていた。ざあざあと葉の擦れる音がしている。光に驚いていた虫たちが、またリィリィと涼やかに鳴き始めた。

何も変わらない、いつもの景色がそこにある。

だが……なんだろう、この胸騒ぎは。

「ちょっと見てくる」

ランタンを持ってネックが言うと、「俺も行く」「私も」と、ノランとリアムも続いた。

三人で建てた丸太造りのこの家は、海を臨む小高い丘の上にある。全貌とまではいかないが、ここからは北にあるアリーベの村をよく見渡せる。

三人は、まず眼下の村を窺った。

アリーベは山間から海へ続く盆地に簡素な家がぼつぼつと点在しているだけで、村とは言うが集落に近い。星明かりに照らされる長閑な風景はいつものままで、あの光の原因があるようには見えなかった。

「なんにもないね」とリアムが言った。

「私たち……揃って白昼夢でも見たのかな？」

三人は、黙って村を見つめた。

やがてノランが「異常なし」と言って歩き出した。

「なんにもなかったんならいいじゃねえか。帰ろうぜ」

「そうだね」

リアムもノランの後に続く。ネックはそれからずっと村を見つめていたが、「おうい、ネック」とノランに呼ばれて、踵を返した。

「は～あ。すっかり眠気が覚めちゃったよ俺は」

「なーんて言って、いつもベッドに入ったら三秒で寝ちゃうじゃない、ノランは」

「そうか？ んなこたあないと思うけど」

「じゃあ、おやすみを言った後すぐに聞こえてくるあの大イビキは誰のなんだよ」

笑い合う三人の間に、ふわりと潮風が吹いた。

そうして三人は、たちまちハッとした。

アリーベの村に居を移して、四年。

四年間を海の近くに暮らし、毎日吹かれているからわかる。

その潮風は、明らかにいつもと違っていた。

普段よりも大きな海水の「粒」が乗っている上に、潮臭さに加えて、ほんの少しの「焦げ臭さ」がある。

「なあ……」

「ああ」

家に向かっていた三人は、家の南、海の見える場所へと歩みを進めた。

この星……『エアルス』は、メルキュール、ルインというふたつの衛星を持っている。

今夜はルインを背景にして、手を伸ばせば掴めそうなくらいに大きく丸いメルキュールが見えた。煌々とする星の明かりが、暗い海に一本の白い道を作っている。丘の下の海岸に穏やかな波が打ち寄せて、ザアザアと音を立てていた。

そして三人は、それを見つけた。

「あれ……」

リアムは水平線に近い位置、遠くの海を指差した。

そこには、大きな水柱が立っていた。距離があるのにはっきりと視認できるのは、水柱がそれだけ大規模なものだからこそ。まるで巨大な氷山が浮かんでいるように見える。天を突くほどの勢いで白い飛沫が上がっており、それが頂から音もなく、不気味なほどゆっくりと崩れている最中だった。

「なんだ、ありゃ！」

ノランが大きな声を出した。

「海底火山が噴火したのかな？」

その水柱をこわごわと見ながらリアムが言った。

「どうだろうな……」

と返事をしながら、ネックは思う。

それにしても爆発音がなかった気がするし、噴火ならばあるはずの噴煙が、飛沫に一切混ざっていない。

それに、疑問はもうひとつある。

あの水柱が異様なほど「ゆっくり」しているという点だ。

光を感じてから家の外に出て、村を見て、そしてここに来るまで最低でも五分以上は経っている。

噴火の水柱とは、そんなに長い間、形を留めているものなのだろうか……。

「もしあの水柱の原因が火山なら、また噴火することがあるかもしれないな。火山活動ってのは連続的なものだから」

ネックが言うと、

「おいおい、火山つったら灰とか降ってくんだろ？」

ノランは少しだけ顔を曇らせた。「俺たちの家は大丈夫かよ。この間扉付け替えたばかりだぞ！」

「待て待て、まだ慌てんな」

ネックはノランの肩をポンと叩いた。

「噴火だとしても遠そうだし、もう少し様子を見てもいいんじゃないか？」

ネックの言葉に落ち着きを取り戻したのか、ノランは「お、おう」と頷いた。

水柱をじいっと見つめながら、リアムがぼつりと呟いた。

「……なんか綺麗だね、あれ」

崩れていく水柱は月光できらきらと輝き、まるで巨大な金剛石が砕かれ、欠片となって散っているみたいだった。

三人は結局、水柱が完全に崩壊するまで海を見ていた。

心配したが、その後は新たな水柱が上がることもなく、海原はすっかりいつもの風景を取り戻していた。